

博士学位請求論文の概要及び審査結果の要旨

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 吉田 直哉 |
| 学位の種類 | 博士（教育学） |
| 学位番号 | 博（乙）第3号 |
| 学位授与の要件 | 大阪総合保育大学学位規程第12条 |
| 学位授与の日付 | 平成29年10月29日 |
| 学位論文題目 | 戦後イングランドにおける子どもの発達環境観をめぐる論争に関する考察—バーンステインとウィニコットの「剥奪」概念に対する批判に焦点を当てて— |
| 論文審査委員 | 主査 玉置 哲淳（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 山崎 高哉（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 志水 宏吉（大阪大学大学院教授・教育学博士） |

〔1〕論文の概要

本論文は1960年代末以降イングランドにおいて政策的・内容的な流れを検討して子どもの捉え方、教育の捉え方の問題点を整理し、新たな子ども観・教育観を「境界」概念を使って定式化しようとする意欲的な論文である。すなわち、「進歩主義的=子ども中心主義的」か「保守主義的=注入主義的」かの二項対立的な議論の背景に、「教育方法を適切に選択すれば、子どもは、その教育方法に託された適切な教育内容を抵抗なく受容でき、その結果、適切な社会化が成し遂げられる」というような両者に共通の子ども観・思想があった。つまり、子どもを「空白」「空虚」な存在として捉える子ども観を前提とし、そのため、そこになにかを「注入」することもでき、その適切な環境を「補償」することも可能になるであった。この「空白」「空虚」としての子ども観に対して、批判の眼差しを向け、子どもに内在化された文化との交流のモデルを提示しようとしたのが本論文である。このために戦後イギリスの研究をバーンステインとウィニコットを中心として検討している。バーンステインは、この子どもの「空白」を「文化剥奪」と呼び、ウィニコットは「愛情剥奪」と呼んでいる。「剥奪 deprivation」とは、何ものかを「奪われてあること」である。本来であれば享受しうる何ものかを与えられる機会あるいは権能を、外在的な要因によって喪失している状態である。子どもを「空白」「空虚」な存在と捉える限り、子どもを他者とそして認識・承認することは困難となる。バーンステインとウィニコットは共に子どもを「充溢した存在と

して捉えることによって、子どもと大人の出会いを自他の間の「境界」(boundary)に触れる機会を提供する場と捉えた。両者は発達環境としての境界の重要性に着目し、子どもが自分自身で境界をどう認識するのかに議論の焦点を据えた。が重要であり、両者の主張の違いにも着目しつつ、その基本構造を克明に検討している。

本論文の構成は、以下のとおりである。

序章 問題の所在と本研究の視座

第1章 1969年イングランドにおける進歩主義的教育改革批判論の諸相：『教育黒書』を中心とするその構図

補章 ピーターズら多元主義者からの「進歩主義」への批判

第2章 バーンステインによる「補償教育」批判：1960年代イングランドの就学前教育に対する社会的分析としての

第3章 B. バーンステインの「教育コード」理論の形成過程：1970年前後の転回に着目して

第4章 子どもの発達をめぐる「環境」に関する D. W. ウィニコットの M. クラインとの葛藤

第5章 民主主義的パーソナリティの形成における「境界」体験の重要性：バーンステインとウィニコットの場合

結章 総括と結論

以下に各章の概要について述べる。

第一章では、イギリスにおける補償教育の実施に伴う一連の批判的流れを整理している。すなわち、遺伝的能力によって子ども間の境界を普遍化するバート、アイゼンクや学校空間の秩序・その規範維持を重視するコックスらの立場などが「教育黒書」に集約できたのは進歩主義の持つ普遍的な子ども観、平等主義を克服する統一戦線が出来たためとしている。

「境界」概念を使えば、進歩主義的な「補償教育」は、その平等主義的な性格が子ども間の差異、「境界」を不透明にさせ、さらに、子ども中心主義的な教育方法を推奨したことが教師・子ども間の非対称性、「境界」を曖昧にしてしまうと見なされ、批判されたと言う。また、ピーターズらは、多元主義の立場から、子どもが関係性で生きているとの視点から補償教育を論じているが、多元社会における公共的議論が「科学」によって保証されるとする合理主義的な前提を持っていることを指摘している。

筆者は、第二章においては、こうした補償教育の議論からバーンステインは次の4点を指摘する。すなわち、①進歩主義教育に対しては生物学モデルに基づく子ども観の普遍性を、②機能主義的なIQテスト擁護論に対しては測定される「知能」の普遍性を、③既存の学校秩序を擁護する議論に対してはその編成原理の普遍性を、④多元性社会における教育問題の公共的議論のための科学的認識を主張する議論に対してはその科学観の普遍性を、それぞれ批判するのである。その意味で、バーンステインは、反普遍主義の立場をとっていたと評価している。

そして、「プラウデン報告」については、子どもたちの能力格差は、彼らがおかれている社会的・経済的背景に起因するものと見なし、この学力格差を解消するために、劣悪な家庭、

地域環境にある子どもたちに対して、教育サービスを分配する「補償教育政策」を提案した。さらに、「進歩主義」的な教育方法が、幼児、初等教育に取り入れるべきであるとした。

こうしたプラウデン報告に対して、バーンステインは、「補償教育」が持つ、「文化剥奪」論という考えと、幼児期を、発達上、決定的に重要な時期として捉える発想の二つを批判する。第一に、彼は、「補償教育」の概念を用いることで、学校それ自体にある「欠陥」から注意をそらしてしまうと述べる。そして、第二には、その「欠陥」を、家族や子ども、コミュニティに属するものと見なしてしまうと考える。つまり、「補償教育」政策は、学業成績の低い労働者階級の子どもたちには文化的体系そのものが欠落しているという前提に立っていた。そのため、必然的に、その教育モデルは、彼らが、学校における象徴の体系に対して抱く認知的な葛藤を見落としてしまった。まさに、子どもの持つ文化的背景と、学校の持つ文化的背景との間に生じる葛藤をバーンステインは問題として提起していた。そして、子どもが経験する葛藤こそが、のちにバーンステインが「境界体験」という形で概念化するものである。

第三章では、これらの分析の理論・概念装置の形成過程を明らかにしている。すなわち、前章での批判は、補償教育批判論における「文脈」概念の導入によって構築された、ペダゴジーのミクロ政治学的分析、およびカリキュラムの知識社会学的分析に依拠して導き出されたものである。それらの概念装置は、実証のための発見的概念を提供するという「言語コード」理論から、デュルケム社会学を消化することによって、より巨視的な規模で学校をめぐる政治的力学を記述する「教育コード」理論という社会思想への転換の中で醸成されたものであることをあとづけた。バーンステインにおける子ども観は、必ずしも明示的であるとは言いがたいが、幼児期から家庭という媒体を通してよりマクロな階級的文化を認知的な構造として内面化する存在であると子どもを位置づけていることは間違いがない。バーンステインにとって学校空間とはまさに、そのような既に子どもが内在化している文化と、学校を媒体として(旧)中産階級が象徴化して示す文化との遭遇、すなわち「境界」の場なのである。労働者階級の子どもたちは、「異質」な価値体系から抽出された学校知、あるいは教育実践のパターンに、就学後、初めて衝突することになると指摘している。

それに対し、第四章ではウィニコットを取りあげ、子どもの捉え方を検証している。すなわち、ウィニコットは、「進歩主義」に同情的な立場から、環境によってこそ、子どもの成熟の意味づけは事後的に書き換えられる可能性を持っていることを指摘し、ウィニコットにとっての子どもとは、保護的な環境の中で自己の持続性を確信して生きながら、内発的な発達と、「環境」という外界に由来する諸刺激との間の融和を試みるような両義的な存在である。その場合に、環境とは、子どもの発達に直接的な影響(衝撃)を与えうる存在であると同時に、その影響の意味づけを振り返り、自分なりに再解釈を与えていくことを許されるような、悠揚迫らざる場であるべきことが、ウィニコットの議論から示唆されたという。この安定的かつ庇護的な環境の中においてこそ、子どもは自他の「境界」を確定させてゆくことができるのである。そして、その「環境」は継起的な変容の中にあり、ある「環境」はそれに後続する変容を経た「環境」の中で初めて意味づけを与えられることになるという。その

ような意味づけ、あるいは再解釈が、子どもの自己の「幸福」な統合を促進するとしたら、その「環境」はウィニコットにとっては適切なものとも言えるのである。ウィニコットにとっての「環境」とは、このように、自他の境界を確定・再画定させようとする試みを受容してくれるような場であり、同時に、他者との出会いを実現できる場でもあると言えよう。

第五章では、バーンスティンとウィニコットが、共に「進歩主義」に対して相対的な距離を保ちつつ、展開した成長経験の意味づけを、「境界」というキーワードに即して読み解くことが試みられている。境界に気づき、乗り越えることを教育の機能と見なすバーンスティンに対し、ウィニコットは、境界を画することそのものが自己の形成にはかならないとした。ただ、「境界」を反省的に意識化することは、自己の意味づけに変容をもたらしうる重大な発達上の経験であるという認識は、両者は共有していたと言いうことができるであろう。

本研究の全体からの結論としては、1960年代のイングランドにおける進歩主義論争は、子どもを取り巻く「境界」を所与のもの、かつ不変のものと見なすか、それとも、「環境」との相互作用の中で、随時(再)形成されてゆく可変的なものと見なすか、という立場の相違に由来するものであったということである。

バーンスティンの進歩主義に対する批判は、要するに、この「境界」の所在を隠蔽しかねないのが進歩主義的教育方法であると考えたことから生じてきたものである。ウィニコットにとっても、「境界」は、自己が他者との関係性の中で絶えず再構成し続けるものであり、境界を意識化しないことは、すなわち、自他の関係性の不全を引き起こし、成熟した人格の維持はおろか、成熟した人格によって形成されるべき成熟した社会(民主主義社会)の維持すらも危機に瀕すると考えられたのである。

バーンスティンとウィニコットは共に、子どもを空白・空虚として捉える考え方を批判した。というのも、子どもを空白・空虚として捉えると、子どもを、充溢した他者として承認することができなくなるからである。子どもを、文化を内在させ、他者とのコミュニケーション履歴を蓄積してきた主体として捉えるならば、その子どもと大人との間には「境界」が存在しているということを認めざるをえない。自他の「境界」を意識化することによって初めて、そこには教育関係という出会いの場が開かれていることが認識されるのである。当然、この出会いの場は、緊張や葛藤を含む体験を子どもにも大人にも与えるであろう。この他者とのぶつかり合いこそが、バーンスティンとウィニコットが「境界」の体験として概念化しようとしたものにほかならなかったのではないか。

結章においては、今後の課題としては、まずは、子どもを他者として承認した上で、子どもとの間の境界に触れる、あるいは子ども同士の間にある境界に触れさせる「境界体験」を、教育の場においてどのようにデザインしてゆけばよいかという方法論を磨き上げていくことを挙げている。子どもを空白・空虚な存在と見る子ども観は、大人が子どもに何を提供しても、子どもの側からの抵抗はあり得ないし、あつてはならないものとして、子どもから大人の側への作用を見失わせるような傲慢な教育観を帰結させかねない。

さらに筆者は、「社会」という発達文脈をどう捉えるかという社会に対する認識と、その社会という発達文脈の中に生きざるをえない子どもをどのような存在と捉えるかという(規

範化された)子どもに対する認識、および、社会と子どもの関係性は如何にあるべきかという認識、という、質を異にする三つの認識が、密接なカップリングをなしていることを示し続けてきたが、この社会認識と子ども認識、および両者の関係性への認識との間の密接なカップリングは、本研究で取り上げた事例を唯一とするものでは当然ありえない、この不可分のカップリングを、社会史的背景を異にする他の教育論争においても剔出し、その構造を緻密に描出する作業もまた、今後に与えられた重き課題だと言うことができるとしている。

〔2〕審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位（論文博士）審査規則は第12条において次の5つの審査基準を公表している。

- （1）当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であること、
- （2）当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること
- （3）当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること
- （4）当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること
- （5）本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること。

まず、（1）当該博士学位申請論文が、当該申請者研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であることについて。

本論文は、修士論文提出以降筆者が審査付の論文を再構成したものであり、筆者の長年の研究の成果を反映した集大成と認められる。本論文は、[論文の概要]で述べた如く、各章の理論構築は文献研究をきちんと行いこれまでの教育学説を踏まえて新たな視座が随所に示されていると評価できる。ただ、テーマの焦点がしっかりしているだけにやや全体的統一性に欠ける面があるがあったが、これも的確に訂正して「境界」の概念を軸にした整理を試み、子どものとらえ方の確固とした視点を提起していることは文字通り集大成と評価できる。

（2）の「独創性ある展開の可能性の有無」について。

本論文で示されている教育・保育の知見、特に、境界概念を使った教育・保育の視点は独創性にあふれており、かつこれまでの知見を超えるものであるといえる。そして、教育理論の構築、幼児教育理論の構築のいずれにおいても独創性のある展開の可能性を持つと考えられる。

（3）の「当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること」について

バーンスティンの補償教育への視座はこれまでの幼児教育においてなかったユニークな視点であり、さらに、境界概念を使ってそのユニークな視点を確固としたものとしている。これは新たな社会的な視点からの提起であることは高く評価出来る。

(4)「当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること」では、本論文は従来の領域で言えば、教育哲学・教育社会学の発想を土台としていると認められるが、その領域においての独自性が認められるだけではなく、新たな学校観、新たな子ども観の提起は、幼児教育や人権教育・障がい児教育などにおいて汎用性が高く、学際性の高い論文と認められる。

最後に、(5)本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること」についてでは、本論文が提起している子どもの発達環境観は境界概念を使って子どもの置かれている状況に対する新たな視点・知見を提起するものであると認められ、今後の研究の1つの軸を示すものであると評価でき、博士の学位にふさわしいと認められる。

以上のように、本論文は高く評価すべき独創性を備えていると認められるが、博士学位学生急論公開審査会において3人の論文審査委員により出された質問や問題点について主なものを記すこととする。

- ・「境界」論と二人の論者の関係について

- ・境界体験という言葉、境界体験するのは誰なのか？境界体験について説明を求める。

- ・自己のなかに過去が凝縮されている点（凝縮点）とそれが未来に開かれていること（どのように自己変容していくか）の緊張点・境界・接点を具体的な説明を求める

- ・独自性、オリジナリティに富んだ論文である。教育法の背景にある子ども観・方法、特に、子ども＝空虚をはらんだ存在とのとらえ方ではなく、バウンダリー概念の整理はどうか

- ・本論（弁証法的な解明）は、現在のイングランドや日本の保育・教育の課題解明にいかに関与するか？逆に、現在のイングランドや日本の保育教育実践にどのような課題意識を持っているか、どんな意義づけを見出せるか？

- ・補償教育の考え方から筆者のモデルを作ることも可能ではないか。

- ・ブルーナーとの関係について何も論じられていないのはなぜか

- ・「空白としての子ども」の捉え方を提起している興味深く、その際に生理的早産説、白紙論との関係を考えてみると面白いのではないか。

以上のように論文審査委員によって指摘された質問や問題点を列挙した。いずれも本質的な指摘であるが、申請者の丁寧で的確な回答が寄せられると共に、問題点のいくつかは今後の課題として認めその解決に向っていくことが期待しうる回答がなされた。

よって、本論文は論文博士（教育学）学位（乙種）を授与するにふさわしいものと認めた。